

或變化が除々に僕の内部に起りつゝあつた。  
何でも人並な幸福であつて好い。

僕は無想庵に葉書を書いて出した。

『象みたいな野郎、速やかに一世紀十八歳の女をオクレ。』

牛太郎みたいな野郎、十八の婆々をヨコセ。』

強羅までの電車賃は八十一錢であつた。

僕は四五日でも居る間に、無想庵が娘を連れて来てくれれば何うにでもする。此んな思ひで胸は熱かつた。

しかしコークスのやうにガラ／＼に燃え切つて、精も根も無くなり果て、腰掛の上へ體を横にして、頭を窓硝子に凭せてゐた。

危妙な事を考へたものだ。

僕は電車が綱渡りして山を登つてゐるのだと思つて、若し此の線路が、何かの評子で切れたら電車はヒツクリ返つて墜落するんだ。